市政について皆様の声をぜひお聞かせください！

目黒哲也 通信

議会報告 Vol.25
令和6年4月発行

●発行人　目黒哲也

所属委員会 ・社会厚生委員会 委員長 ・議会運営委員会 ・議会広報編集特別委員会
・都市計画審議会 ・新潟県後期高齢者医療広域連合議会議員
・魚沼地域特別養護老人ホーム組合議会議員

●連絡先　目黒哲也後援会事務所

〒949-6612 新潟県南魚沼市東泉田1076-1　TEL 025-773-6253
携帯 090-4011-7563　E-mail kinseikan.tetsuya430623@gmail.com

目黒哲也
公式ホームページ
こちらから➡

目黒哲也通信のバックナンバーを希望される方は、メールあるいは電話にてお気軽にご連絡ください

Facebook　Instagram　LINE　X

ごあいさつ ～冷たい雪を熱き夢に～

予算議会と言われる3月定例会が閉会し、令和6年度当初予算が可決されました。皆様には日頃から市政へのご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

伝統的な祭りである第40回しおざわ雪譜まつり、そして約1,200年の歴史を持つ浦佐毘沙門堂裸押合大祭が、運営者の情熱と地域の一体感、そして来場者の活気で盛会裏に幕を閉じ、雪国に春が訪れてまいりました。

雪国の歴史は、昭和前半期は雪をどう克服するか【克雪】、昭和後半期は雪をどう利活用するか【利雪】、平成になると雪をポジティブに捉える【親雪】、そして令和を迎え、いよいよ雪の産業化が進んで来ております。まさに“冷たい雪を熱き夢へ”と変える取り組みは、未来への可能性を感じます。

そんな可能性の光を感じるイベントが、3月に牧之通りにおいて雪国青年会議所主催で『雪国らんたん ～ふるさとに光を灯す日～』が開催されました。夜空に舞い上がる一つひとつの想いが未来を灯しているかのようでした。これからの地域を担っていく青年たちの未来への覚悟でもあった取り組みではなかったでしょうか。

今年は市政20周年を迎えます。40数年経っても色褪せることのない理念である「雪国のふるさとに熱き創造の息吹と高き理想の光を」を高々と掲げ、ますます邁進して参ります。

サンヨー！ サンヨ！ 会派メンバーと共に
浦佐毘沙門堂裸押合大祭

雪国らんたんが牧之通りを舞う（提供：雪国青年会議所）

～次の20年への第一歩として～ 令和６年度当初予算が可決されました

令和６年度当初予算総額 710億6,425万円、一般会計 395億6,000万円

令和６年度 重点施策

【保健・医療・福祉】

- ○第3子以降の保育料無償化
- ○子育てICT化
- ○がん治療に伴うウイッグ・乳房補整具購入費用助成

【教育・文化】

- ○英語の学力向上
- ○AIを活用した学習ドリル導入

【環境・共生】

- ○太陽光発電設備設置（市役所敷地）
- ○庁舎窓ガラスの遮蔽コーティング
- ○住宅への太陽光発電設備設置・省エネエアコン買い替え費用補助

【産業振興】

- ○林業振興促進
- ○用排水路等の新設・整備

【行財政改革・市民参画】

- ○空家等対策
- ○市政20周年記念事業

一般質問
※質問と答弁は一部抜粋

伝統的な祭りの継承について

南魚沼市議会 録画配信 | 検索
右のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると、一般質問の録画映像がご覧になれます。

そこに住む若者の奮い立つ気概を継承していきたい

目黒 毎年、雪まつりは2月10日前後で開催してきたが、開催1か月を切った時期での突然の廃止決定の公表はあまりにも突然過ぎたのではないか。

市長 令和5年4月の実行委員会総会において、地域の祭りは形を変えても残していくことは重要だが、社会の流れに合わせていかなければならないのが実情といった意見が交わされ、実行委員会の解散が承認され、令和6年1月に廃止の公表に至った。

幻想的な雪美洞（かまくら）

目黒 前身は六日町雪まつりであったわけだが、六日町の方々の意見や要望などは聞いてきたのか。

市長 平成30年の段階で、六日町大橋下の河川敷会場では狭く安全確保ができない、また行政区の参加が難しいとの意見が出ていた。令和4年10月に六日町13行政区に対して、開催を含めた今後の方向性について改めて意見を聞いたところ、かまくらや雪像づくりの協力を依頼されても高齢化による担い手不足や、若い方からの協力が得られない。六日町開催にこだわらず、市内全域を開催候補地として検討したらどうかとの意見が上がった。

しかし冬の行事として、大和地域では裸押合大祭、塩沢地域では雪譜まつりやスキーカーニバルを開催しているため、他会場での開催は難しいとの結論に至った。

六日町雪まつりの再開には自ら立ち上がってくる気持ちと熱意

目黒 雪へのこだわりは、市長就任時から一貫する林市政の基盤であり、「冷たい雪を熱き夢に」は、基本理念である。今後の雪まつりの在り方を伺う。

市長 六日町雪まつりのときから、行政が前に出てイベントを作ってきた流れがあるが、誘客が目的ではなく本来の祭りは住民が楽しむことであり、そこにもう1回立ち会っていくべきではないか。

イベント会社を連れてくればお祭りができる、というようなイベントとは違う。六日町雪まつりを再開するのであれば、一体どういうものを目指すべきかどうか。行政は気持ちや熱意に対して一緒に寄り添って頑張っていこうと思う。私は自ら立ち上がってくることを心から期待したいと思う。

目黒 伝統的な祭りは文化財として位置づけ、担当を商工観光課や観光協会だけではなく、社会教育課文化振興係や子どもたちへの教育目的として学校教育課をも加えて、ひとつの事業として守っていく考えはないか。

市長 祭りの開催のときだけではなく、例えば裸押合大祭ではユネスコの関係で一緒になって動いているし、建物の修復等も協力したりと、行政はいろいろと横断的に関与してると思っている。祭りの立ち上がりの趣旨や歴史もあるので、本質をとらえて関与していく。

職員としてではなく、地域人として支えていく

目黒 市民や民間だけではなく、祭りを存続していくには行政職員も積極的に祭りに関わっていく必要があると思うが。

市長 合併前は、各旧町単位に祭りが1か所だった。合併した現在、行政は無限に職員を出せる体制ではない。職員だからではなく、地域人として祭りを支えていくべきだ。

目黒 近年、民間のノウハウを行政運営に取り込み、活性化を図るために職員を民間企業に派遣する官民人事交流に取り組んでいる自治体が増えてきている。

小学生の鳥追い

公務外の祭りの実行部隊に職員が積極的にかかわることは地域貢献の観点もあるが、組織の枠を超えた連携による対応力や現場力を培い、またそこで得た人脈・経験・知見を公務で活かせると思うが。

市長 これまでも市が関与して、実行委員会の中に市の職員が入って活動をしてきた。支えとしてばかりでなく、職員としての資質向上や関係性の構築ということで、長い行政の歴史の中で続けられてきてるんだろうと思う。これからも人材育成の場として期待したい。

目黒 地域の伝統を私たちの世代が未来へつないでいく責務がある。伝統的な祭りを存続していく考えは。

市長 祭りは地域の風土や文化を具現化したもので、イベントは観光や商業的な要素が強い。近年、祭りがイベント化してきているのではないかと感じている。祭りとイベントの違いをはっきりさせないといけないと思う。

今後も神事を市として守っていくことが重要だが、まずは地元の熱意がなければならない。行政がやる祭りはあり得ない。祭りをツールに、そこに住む若者の奮い立つ気概を私は継承していきたい。

第30回（1980年）「古城の舞」 坂戸城をモチーフに製作された幅30m程の巨大な雪像ステージ

めぐろの目

キーワード㉖ 伝統的な祭りの継承

全国的に、祭りの多くは自治体からの補助を受けて運営されており、資金不足や担い手不足などの要因で消滅する祭りがコロナ禍を契機に増えてきている。

そもそも日本の祭りは町内会や地域コミュニティ単位で行われ、豊作への願いを込めたり、五穀豊穣など自然に対する感謝を込めて行われている行事が多くみられる。そのため、人口が減少し地域経済が縮小した地域では祭りがどんどん消滅している状況にある。

地域らしさの象徴である祭りが消滅すれば、市の魅力がなくなるばかりでなく、地域が一体となる機会が失われて地域の分断を招き、加えて“やる気”や“活気”にあふれる場がなくなれば、地域の衰退を招き兼ねない。地域の誇りや地域らしさをいかに継承するかが、市の未来にとってとても大切なことだと考える。

1．祭りは【地域のアイデンティティ】

祭りとは、単なる一過性のイベントやフェスティバルではない。そこには自然や歴史・社会の影響を受けながら、今日まで長年、脈々と受け継がれてきた空間的・時間的厚みがある。だからこそ継続する価値があると思う。祭りは地域のアイデンティティを継承するものでもある。

2．祭りは【地域のあらゆるコミュニティを横串で刺せる唯一のコンテンツ】

① 世代を超えた地域文化の交流や次世代への伝統文化の継承

② 地域住民と観光客の交流による文化交流

③ 地域住民の誇りや一体感が生まれる

3．祭りは【行政運営の活性化】

近年、職員を民間企業に派遣する“官民人事交流”に取り組んでいる自治体が増えてきている。それは、社会情勢の変化により行政が対応すべき課題の複雑化・多様化に対応するために、民間企業の効率的かつ機動的な業務手法を体得し、行政運営の活性化を図るためである。

公務外である祭りの実行部隊に職員が積極的にかかわることは、地域貢献の観点もあるが、組織の枠を超えた連携によって、“対応力”や“現場力”を培い、そこで得た“人脈・経験・知見”を公務で活かせると思う。

～日本の伝統を私たちの世代から未来へつないでいきたい～

今や自治体の予算や寄付金がなくなったり、高齢化で人手が減ったことによる担い手不足等、なんらかの外的要因で祭りは、存続できなくなるのか!?

地域の誇りとして、地域のアイデンティティとして継承していくという意識がなくなってしまえば、簡単に祭りは途絶えてしまうだろう。逆に言えば、必ず継承していくという意識が残っているうちは祭りは存続し、先人たちの思いや歴史・文化は継承されていく。

これまでも、自然環境や歴史環境・社会環境の影響を受けながらも、先人たちは祭りを今日まで受け継いできてくれました。つまり祭りを続けていけるかどうかは、その「思い」をいかに守り続けていくかにかかっているのではないか。その思いを継承し、次世代へ伝えていくことが、現代の我々のひとつの本質的な役割だと言えるのではないでしょうか。

雪国らんたんに想いを込めて（提供：雪国青年会議所）